

## ウィリアム・アダムズの埋葬地は平戸か

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

43

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

1997-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006949>

## ウィリアム・アダムズの埋葬地は平戸か

宮 永 孝

ジリングラムは、イギリス——ケント州の小都市である。この市はチャタム（ロンドンの東五四キロ）と接し、テムズ河口の湾頭に位置している。今日の人口は約七万二千である。ロンドン・ブリッチ駅よりサウス・イースタン鉄道を利用すれば、ロンドンから一時間ほどで行ける。

チャタムはまだ古い建物を多く残す町であるのに反して、ジリングラムは新興の市といった感じで、あまり見るべきものはない。この市は、昭和五七（一九八二）年横須賀・伊東市の提携都市となり、今日に至っている。当地は、江戸時代初頭にわが国に渡来し、日英の通商に従ったイギリス人航海士ウィリアム・アダムズ（一五六四〜一六二〇）の生誕地でもあることから、姉妹都市となったものようだ。ジリングラム市には、かれの記念碑（時計塔）が建っている（図版Ⅰ）。

ウィリアム・アダムズ（以下、アダムズとする）は、一五六四（永禄七）年ごろ、丘陵の市ジリングラムで生れた。かれの日本名は、三浦安針という。その名はわが国ではかなり知られている。安針は、近世初期にわが国に來航したポルトガル船の航海士の意で、行師や安針手ともいわれた。アダムズは日歐通交史上の重要人物であったから、これまでもいろいろ書かれてきた。

かれは一二歳のとき、ライムハウスの造船家ニコラス・ザギンのもとで二一カ年徒弟奉公したのち、イギリス海軍

に入り食糧の輸送に従事したり、貿易会社に入ってアフリカの北岸へもたびたび航海した。一五九八年六月（慶長三・五）オランダ東インド会社が派遣した五隻から成る艦隊に航海長として乗り組み、これが日本に来る直接の契機となった。アダムズは最初艦隊所属のホープ号に乗り、ついで一六〇トンの帆船リーフデ号に転じ日本に向ったが、大暴風雨に遭い、一六〇〇年四月一九日（慶長五・三・一六）九州の北西岸豊後（白杵の港外）<sup>(2)</sup>に漂着した。この時点で、百十人いた乗組員は、壊血病その他の理由でつきつきと死に、生存者は二四名となり、そのうち歩ける者は、アダムズのほかわずか六名であった。

来日後、アダムズは豊後王（白杵城主太田一吉）や家康の厚遇をうけ、四、五年後には家康より西洋型帆船の建造を命じられ、伊豆の伊東の海岸において八〇トンと一二〇トンの帆前船を造った。かれは時に家康に数学や幾何学の一部を教え、またかれの外交顧問となり、意見をのべた。その後、相模の三浦郡逸見村（横須賀に近い）に二百五十石の知行を賜わり、また江戸の日本橋魚河岸（安針町）に屋敷を与えられた。かれはさらに江戸大伝馬町外数ヶ町の名主であり伝馬年寄であった馬込勘解由の娘をめとり、一男一女をもうけたが、一六二〇年五月二六日（元和六・四・一四）病により平戸において没したとされる。享年五七歳であった。

アダムズの経歴を略記をすれば以上の通りである。その終焉の地と埋葬地については、明治期以来史家によっていろいろ調査され、また書かれて来た。が、新しい研究も見られず今に至っている。もとより拙稿は、何んら新説を提出するものではない。本稿は、アダムズ終焉の地と埋葬地、その遺骨の行方について、これまでに明らかにした有力な情報を紹介し、新たに問題点を提起したもので、今後の調査研究の一助となればと願っている。

アダムズの死に関する日本側の古い記録としては、「元和年録」<sup>(三)</sup>坤にみられる「英吉利人ういりあむ・あだむす、

<sup>三補</sup>抜針、肥前平戸に没ス、幕府、其遺領ヲ嗣子じよせふニ授ク」（『大日本史料第十二編之三十三』）や「其後この村（逸

見——引用者)へ来て、相果けるとなり、唐人病の床につき、吾果なは、江戸眺望の地へ葬られよとて相果ける、此故、此山中に墓あるよし申傳ふ」(加藤山壽「三浦古尋録」「通航一覽」卷之二百五十二所収)などがある。かれが死んだのは三浦郡逸見村ではなく、平戸であることは、史家のこれまでの研究を総合すると、ほぼ間違いなく、断じてよいであろう。

アダムズ終焉の地とその埋葬地に関して初めて本格的な論考を発表したのは、東京帝国大学文科大学の歴史学講師であったルードヴィヒ・リース博士(一八六一〜一九二八、一八八七〜一九〇二在任)である。かれは明治三二年一月「日本アジア協会」において、「平戸に於ける英国商館の遺跡の歴史」(1613~1623)【『史学雑誌』第十編第二号】を発表したのに続いて、同三三年二月七日横浜で開かれた「ドイツ東亞学会」の例会において、「ウイリアム・アダムズと逸見におけるかれの墳墓」<sup>(4)</sup>と題する講演を行ない、のちそれを『東アジアの自然、民族学のためのドイツ協会報告』(八卷)<sup>(5)</sup>に発表し、さらにその訳文は『史学雑誌』(第十三編第六号)に掲載された。

リース博士は前者の論文において、平戸埜方(崎戸)町に残る「オランダ塀」のことを、イギリス商館墓地の壁の一部であると断定し、その近傍こそがアダムズの埋葬地であるとし、また後者の論文では「アダムズの死せしは平戸の地なりと予の確信して疑はざる所なり」<sup>(6)</sup>といい、さらに「埋骨の地も平戸なりと断言する者なり」<sup>(7)</sup>と論じた。

その推断の根拠となったものは、「リチャード・コックス日記」(以下「コックス日記」とする)であったと考えられる。これに対して異議を唱えたのは、平戸の長崎県立中学猶興館<sup>(8)</sup>教諭加藤三吾であった。加藤は明治三五年以来、平戸に住み、ハーグの古文書館に蔵する元和七(一六二二)年の平戸図(図版II)にみられる白地に十文字の旗(セント・ジョージの旗)<sup>(9)</sup>の地点について踏査を試み、さらに松浦伯爵家と浦田進太郎所蔵の平戸古図から、この旗が翻っている場所を、今の鏡川と戸石川との中間にあたる丘陵頂上——平戸村小字寺の坂であることを知った。<sup>(10)</sup>ま

たここにあった建物は、イギリス商館員のための住宅と考えた<sup>(11)</sup>。

今日、平戸の崎戸町の坂路に残る「オランダ塀」(長さ約三六メートル、高さ約二・五メートル)は、イギリス人墓地の外垣ではなく、オランダ商館の外壁の一部なのである。加藤はさらに「コックス日記」等を精読するかたわら、土地の古老らの意見をも聞き、独自の調査をつづけ、その成果を「平戸に於ける英国商館の遺跡並にウィリアム、アダムスの埋骨地」(第一回、第二回)〔史学雑誌〕第十九編第三号、同第十九編第十号)と題して、二回にわけて発表し、さらに後年『三浦の安針』(明誠館書店、大正六・四)を著すとき、再録した。

イギリス人が初めて日本にやって来たのは一六世紀のことで、村井昌弘『耶蘇天誅記』<sup>(12)</sup>に、永祿七(一五六四)年にイギリス国の船が肥前五島にやって来、本国の物産を商った、といった条がみられる。平戸に初めてイギリス人がやって来たのは、天正八(一五八〇)年の夏のこと、藩主松浦隆信と通商交易を約し、ついで延宝元(一六七三)年五月に再びイギリス船が通商を求めて来航し、七月に帰帆した、といった古記録がある<sup>(13)</sup>。

平戸にイギリス人がやって来て、商館を設立したのは慶長一八(一六一三)年のことである。オランダ人におけること五年であった。このときイギリス東インド会社の艦隊司令官ジョン・セーリス(一五八九?—一六四三)<sup>(14)</sup>は、リチャード・コックスを商館長に任じ、館員(イギリス人八名、日本人通訳三名、従僕二名)を残して帰帆した。コックスは平戸町の海岸に商館とするべき家屋を求め、やがて支那人の頭目である顔思齋(英名・アンドレア・ディティス)が所有する家屋を借りる契約をむすび、それを商館にあてた。商館が設立されるやイギリス人は毎年建物の修繕や拡張をおこない、元和元(一六一五)年には付近の町家二軒を買い取り、同七(一六二二)年にはさらに三軒を買い入れて倉庫とし、波止場を海岸に三間突き出した<sup>(15)</sup>。元和七年の建築工事は、三月初旬に始まり六月下旬まで及んだものだが、それに要した人夫・職人も多く、この間人夫九二七〇人、大工三七三三人、左官一三四人、瓦工七三人、

石工四二人などを使役した。またこの時期、例のセント・ジョージの旗が翻っている家屋を、商館の西方約十町ほどの丘陵の上（寺坂丘上の平垣地域）に新築したものと考えられている。

平戸のイギリス商館の所在地に関する日本側史料（平戸の旧記『小沢書留？』）に、「町並エゲレス崖」といった字句がみられるそうだが、これ以外になんら依拠すべき史料はなく、加藤は「コックス日記」の記述から、その位置を「平戸宮ノ町伊藤榮三郎氏居宅（のち「萬昌楼」と称する料理店、現在の菓子店「サン・キタガワ」あたりか〔図版Ⅲ〕）並に其附近数棟の町家所在地、これ英国商館の遺跡なり」と断定した。

イギリス商館は、平戸において日本との交易を開始したものの、オランダとの競争や特権の制限等により、商取引は振わず、利益も上らぬことから、開設十年にして閉鎖するのである。アダムズは、イギリス人が慶長一八年平戸に商館を設けるや、招かれてその顧問となり、またみずから交易の仕事に従った。かれは平戸に來た当初、通詞谷村三三郎方に寄寓し、のち二戸を構え、日本女性と共に暮らし、さらに一子をもうけ、木引田町の木田弥次右衛門の持家で暮らした。同人は大坂から移住した貿易商であった。アダムズが住んだ家はのちに木山普次郎氏の居所（木引田町天満宮下の宅地）となった。「コックス日記」にみられる Yasimon dono, Adams host (アダムズの宿主ヤシモンドノ) は、まさにこの木田弥次右衛門であり、アダムズは同人の借家で亡くなったとされている。

つぎに説くべきは、アダムズの埋葬地についてである。イギリス人が平戸で暮らした慶長一八年六月から元和九年一二月までの約十年間に、商館員や入港した船の乗組員の中から、平戸の土となる者も少なからず出た。今、年代記的に平戸で没したイギリス人について列挙すると、つぎのようになる。

〔氏名〕

〔職名〕

〔死亡年月日〕

ウィリアム・ポーリング William Pauling

船長の助手、航海士

一六二三・九・二七

アンドリュ・パーマー Andrew Palmer

給仕

?

イギリス人某 [原綴不明]

?

?

トマス・デイヴィス Thomas Davis

大工

一六一五・一〇・二

トマス・ヒース Thomas Heath

ホゼアンター号の大工頭助手

一六二五・一〇・一〇

ベイリ Baylie

商人

一六一七・一

ユウエン・レイク Yewen Lake

アンドヴァイアス号乗組員

一六二七・八・一七

ニールソン Nelson

?

一六二〇・三

ウィリアム・アダムス William Adams

イギリス商館顧問

一六三〇・五・二六

ウィルキン Wilkin

ジェイムズ・ロイヤル号の事務長

一六二〇・一二・六

ジョン・エイヴェリ Jno Avery

エリザベス号の事務長

一六二二・七・二八

ジョン・ロウン John Roan

オランダ人を殺害し、絞首刑となる

一六二二・?

トマス・ハロッド Thomas Harod

?

一六二二・一〇・一八<sup>(21)</sup>

このうち船長の助手ウィリアム・ポーリングは、肺病により商館において没し、アンドリュ・パーマーは、同胞とのけんかかもとで死亡し、トマス・デイヴィスは天然痘により亡くなり、トマス・ヒースは赤痢にかかって死亡した。ジョン・エイヴェリはオランダ人によって殺され、ジョン・ロウン（プリストル出身）は、オランダ人を殺害した科で絞首刑となった。このように平戸で没したイギリス人の死因は、まちまちであり、非業の死を遂げた者も少なくない。

アダムズが息を引きとったのは、木引田町の木田弥次右衛門の持家であったことはたしかなようだが、問題はかれの遺骸の埋葬地である。かれの亡骸は、当時「キリスト教徒の墓地」(the Christian burial place) とか「われらがふつうの埋葬地」(our ordinary burial place)<sup>(22)</sup> と呼ばれた場所に埋られたものと推測されるのである。アダムズより以前に亡くなったものは、「キリスト教徒の墓地」(外国人用の「共同墓地」と解される)に埋葬されたものと考えられる。<sup>(23)</sup>

イギリス商館が作事奉行との話し合いで、「十三間四方」(13 tatamies square)の土地を新たに墓地用として与えられたのは一六二二年二月二二日(元和七・一・一)のことである。同年、商館長リチャード・コックス(一五六六〜一六二四、一六一三〜二三在任)は、住宅・倉庫・波止場などを造る工事に着手したのを機に、墓地造りにも手をつけ、三月二六日から五月五日までの間に用材として、

丸木……………一六〇

角木……………六二

間板……………一一〇

垂木なまき(屋根板を支えるもの)……………一七〇

門戸用大丸木……………四

同大角木……………二

などを船大工棟梁山崎弥右衛門から買い入れ、さらに、

人夫(土方)……………五八三人

大工……………一三八人



瓦工……………一五人

左官……………二人

を役使し、ついにイギリス人用の共同墓地を完成させた。墓地の建設に、延べ人員にして九百名ちかい日本人が使役された勘定になる。

興味を覚えるのは、これだけの資材と人員を用いて造った墓地の形状である。コックスは、墓地を造るにあたって「十三間四方」(十三坪)の周囲に石垣をめぐらした<sup>(25)</sup>、と日記に記している。が、木材の用途については何も述べていない。先に挙げた木材から考えられるのは、石垣の内側に遺体を埋葬したとしても、その石垣の周囲をさらに木柵または板塀(屋根を付け、瓦をのせた)とし、さらに墓地入口には屋根付きのくぐり戸を付け、その上に瓦を置いたとも思われる。なお、この墓地建設に一ヵ月以上も大勢の人夫を使わねばならなかったのは、整地に手間取ったからであらうか。

平戸のイギリス人墓地の形状は、これでおよそ明らかになったと思えるが、つぎにアダムズ遺骸を葬ったと考えられる墓地の位置について述べてみたい。加藤は、「コックス日記」の記述から、アダムズの亡骸は、ウィリアム・ポリング、ニールソン、ウィルキンらと同様に、この「十三間四方」の墓地に埋葬されたに違いない、と考えた。墓地の所在地は、遠見丘の東南側——山県金十郎氏の旧邸うしろの畑地がそれである、という。

加藤の推断の有力な史料となったものは、「コックス日記」(一六二三年の条り、「パーチース廻国記」所収)である。船長の助手兼航海士であったウィリアム・ポリングが、一六二三年九月二七日に肺病で死に、翌朝、船長をはじめ船員、商館員らが棺を「キリスト教徒の墓地」に運ぼうとしたとき、僧侶らは西洋人の死骸が町中を通るのを嫌ったので、棺をボートに乗せ、オランダ商館の「えびす埠頭」(石段)まで運んだのち、陸に上げた。イギリス人らは

陸路オランダ商館に赴き、そこで会葬者の行列を整えた。やがて葬列は、大勢の地元元老人や子供たちを従えて、墓地に向った。

イギリス商館がある宮ノ町から、崎方町のオランダ商館に行くには、必ず七郎宮前を通らねばならず、宮ノ前は古来葬式の通行を禁じられていた。<sup>26</sup>だからイギリス側は、死骸をボートに乗せ、水路オランダ商館まで送り、会葬者は町中を歩いて同商館まで行き、そこから葬列を整え、墓地に向ったのである。「コックス日記」には、葬列がどのような道順をたどって「キリスト教徒の墓地」に至ったかについては、何も記されていない。

「コックス日記」に出てくる龍泉寺 (Dusenchi) は、昔は鐘鑄崎にあったものとのことだが、元禄年間亀岡築城のため今の所に移転した。遠見丘の西南側にある宮川宅は、昔の誓願寺の跡であり、附近一体は同寺院の墓地であった。従って遠見丘の南側は、昔から崎方天満宮の境内であった。<sup>27</sup>以上のことから、加藤は「キリスト教徒の墓地」は、遠見丘の東側でも西南側でもなく、必ず東南側に位置するものと考え、オランダ商館の西北約三丁余の遠見丘の中腹——山県金十郎氏の旧宅うしろの畑地であろう、と推定した。

遠見丘の東南側の地形は、赤褐色のローム層<sup>(28)</sup>(砂・粘土の風化堆積物)であり、段々状の畑地<sup>(29)</sup>(今は雑草の茂った竹ヤブのようなもの)をなし、ここにオランダ人とイギリス人の墓地が二つあったものと考えられた。しかし、それらの墓地跡を示す、「石垣」や「墓石」など、目印となるようなものは何ひとつ残ってはいないことはいまでもない。

おそらくアダムズの遺骸も、ウィリアム・ポーリングその他のイギリス人と同じように、水路オランダ商館に運ばれ、そこで葬列を整え、オランダ屏脇の坂道を上って、数百メートル先の林間の墓地(畑地内)に運ばれ、葬られたものであろう。

ウィリアム・アダムズの永眠の地と埋葬地が平戸であることは、リース博士の考証その他によって、今日学界の定説になっている。リース博士の考証の根拠となったものは、アダムズが亡くなって六日後の一六二〇年五月二二日（元和六・四・二〇）、遺言管財人に選ばれた商館長リチャード・コックスと商館員ウィリアム・イトンら二人が、かれの財産目録<sup>(30)</sup>を作ったことによる。横須賀市逸見の塚山公園は現在、桜の名所として知られ、そこから横須賀港と付近の景色を眺望できることから行楽客を呼んでいる。が、ふしぎなことに、ここに国指定の史跡「三浦按針墓」がある（図版Ⅳ）。リース博士の否定説にもかかわらず、ここにある二基の墓がアダムズ夫妻の遺骸を葬ったものであるかどうかといった議論が起り、明治三八（一九〇五）年五月二日神奈川県知事、イギリス公使クロード・マクドナルド卿夫妻、横浜在住のイギリス人ジェームズ・ウォルター、ホイラー医師らの立ち合いのもとで発掘が行なわれた。が、「墓石の下からは何等の遺物も発見されなかった」<sup>(31)</sup>ため、アダムズが平戸で没したことへの信憑性はいっそう増した。

逸見の塚山公園に建っている、アダムズとその日本人妻の墓といわれる二基の墓石（「壽満院現瑞居士」・「海華王院妙満比丘尼」）が、現在の地に建てられたのは寛政十（一七九八）年二月のことのようだ。<sup>(32)</sup>アダムズが没して約百年後のことである。

この古い墓は、横浜居留地に住むイギリス人実業家ジェームズ・ウォルター（James Walter、一八四七〜一九〇九）<sup>(33)</sup>によって明治七（一八七四）年に発見されるまで、世間の注意をひかず、放棄されていた。その発見の糸口を与えたのは、茅を刈って父兄の仕事を助けていた村の二人の子供らである。かれらは深林の中を跋涉し、茨ふかい所に分け入ったとき、偶然二基の古い墓を見つけたのだが、当時、墓の前の石階はほとんど土砂に埋もれていた。あたり一面は茨らが茂り、路らしいものも何もなかった。

逸見の村人は、これがイギリス人とその妻の墓であることを知らず、按針塚は韓国人の塚であろうと考えていた。ウォルターは、この墓を発見すると早速、イギリス公使館の通訳アーネスト・サトウに連絡したが、当人もはじめ村人の言葉を信じて、イギリス人の墓ではない、と断言した。<sup>(34)</sup>

ともあれ逸見の安針塚の発掘に失望したイギリス公使マクドナルドは、同年二月上旬夫人とともにこんどは平戸を訪れ(図版Ⅵ)、アダムズの事蹟をたずね、埋葬地を調査した。けれど何ら得るものは無かった。そこで当時中学猶興館の教諭であった加藤三吾に調査を依頼し、むなしく東京に帰った。<sup>(35)</sup>

加藤は元和七(一六二二)年製作の平戸図(ハーグの古文書館蔵)中にみられる、十字の旗(セント・ジョージの旗)の建物のほるか後方に□を画した箇所があることに注目し、この地点こそ、あるいはアダムズが埋られた墓地かも知れぬ、と考え、踏査したところ、一基の墓標を発見した。それは、

——高さ約二尺五寸、幅約三尺、奥行約一尺ほどの、神庫型の墓。

であった。前面には石扉があり、その奥の正面には僧侶のような人物が端座した姿が刻されていた。

その頭上には梵字が彫られ、右側には「賞翁夢、禪定門」、左側には「□元和□年拾月廿九日」と刻印してあったので、これはふつうの人の墓ではない、ひょっとしてアダムズの墓ではないか、との推定のもとに発掘を行なった。

地下から出て来たものは、棺材の一部かと思える腐った木片と数本のさびた釘のみで、棺は寝棺のように思えた。

これら以外に考証に役立つものは何ひとつ発見できなかった。<sup>(36)</sup> その後も史家が平戸を訪れては、調査を試みるが、何ら有力な史料と出会うことはなく、アダムズの埋葬地の調査にしても進展なく今日に至っている。

それにしても平戸の外国人墓地は、なぜ地上から忽然と姿を消したのであろうか。なぜその痕跡すらないのか。その理由は、寛永一四(一六三七)年一月に起った島原の乱の前後、時の平戸領主松浦肥前守鎮信は、外国人の墓地

を徹底的に破壊することにし、墳墓の痕跡を消す命を出したためと考えられている。だから遺骨は掘りおこされ、その大部分をあつめ、広瀬沖合(37)の海中に投棄された。幸い一部は秘かに隠匿され、土中に埋めたものらしい。(38) 翌寛永一五年二月、島原の帰途、上使松平伊豆守・戸田左衛門は平戸に寄り、四日滞在した。同一六年上使太田備中守は島原および平戸を巡視し、一七年九月には井上筑後守が幕命をおびて平戸に来ると、オランダ商館破壊を命じた。これより先、松浦家はキリシタンの嫌疑をうけ、危急存亡のときを迎えていた。

松浦肥前守鎮信の先代は、壹岐守隆信といった。その母は大村丹後守の娘で松浦泰岳公に嫁し、松東院と号し、キリシタン信者であった。壹岐守隆信の時代、そのちよう愛をうけた家老職に浮橋主水（旧姓佐志方市左衛門）という者がいた。かれは主人が亡くなったとき、殉死しなかつたので、平戸の住民は「切らず主水」といって侮辱した。やがて浮橋は江戸に出奔し、老中松平伊豆守にざん言したために（「浮橋主水事件」）、松浦家はキリシタンの嫌疑をうけ、苦境に陥った。

この難局を救ったのは、品川東海寺の江月和尚である。かれは幕命を奉じて平戸に赴くと、内意をもって勝尾岳には仏寺（「興国山正宗寺」）を、また各所に三界万霊の供養塔(39)建てさせることによって、この事件を解決に導いた。寛永一六年八月、浮橋は伊豆大島に流罪となった。(40) 平戸のオランダ商館が破壊されたのは、この事件の翌年のことであり、このときすでに遠見丘の外国人墓地は、破却されたあとのことと考えられている。

加藤は、その後も平戸の外国人墓地とアダムズの研究をたゆまず続けたようだが、相変らず進展はなく、研究も一時頓挫の感があり、いたずらに時だけが過ぎて行つた。大正六（一九一七）年春、それまでの苦心の研究をまとめ「三浦の安針」（東京・明誠館書店）を上梓した。ところが、かれの研究に突如一条の光を投げかけるようなことが起つた。

昭和六（一九三一）年ごろ、平戸町字遠見に、三浦い女という、当時八四歳の心身頭腦ともにすっかりした老女が暮らしていた。彼女の家の門前の畑のすみに昔から「安針墓」と称する墓墳があった。彼女はわが家へ由緒があるものと考え、盆と正月に供えものをし、供養をおこたらなかった。その墓墳は修繕や手入れを受けることもなく、荒れるにまかせられていた。が、昭和四年以来、四度ばかり、ふしぎな夢をみた。第一回目は、同年にみたもので、日の浦方面から潮が打ち寄せて来、たちまちそれが墓のあたりまで殺到した。そのとき封筒大の紙片が飛び舞い、「ご利益があるぞ！ ご利益があるぞ！」といって、館山の方へ飛び去って行った。

第二回目は、昭和五年のある夜みたもので、墓のあたりが一大湖水となり、その堤の上に人影が二人現われ、「わかったか？」といって、いざことなく姿を消した。第三回目は、昭和六年のある夜みたものである。キリスト教徒が「作場（田畑）の道がせまいので、道をつくりました」といった。見れば大きな道が一本造られていた。その道を通ってわが家へ急ぐと、うしろの方で「奥様、道を作るときに邪魔になるので、お墓を移しましたら、こんなものがありました」といって、質の悪い刀を見せたので、それをちっと見れば、赤錆あか錆の刀であった。それを手にし、子供や孫に見せてやろうと思つて、帰途についたとき、夢からさめた。

第四回目は、昭和六年のある夜みたもので、耕作のじやまになるので、墓を他に移したところ、キリスト教徒が「こんなものが出て来ました」といって、堀りだした虫ばみのある古小筆筒（三段物）と書物を十冊ばかり示した。その書物を開いてみると、横文字が書かれていて、所々に挿絵が入っていた。横文字は読めないから、誰かに読んでもらわねば、と思つたとき、目がさめた。<sup>(1)</sup>

三浦い女は、このような夢物語を人に話すと一笑に付されると思つて、誰にも話さず、胸のうちに秘めておいた。が、親戚の川口某が訪ねて来たとき、このような夢をみたと語つた。同氏も話を聞いて奇異に感じ、墓墳の改葬を提

案した。けれどもかれは老体ゆえに奔走斡旋はできないことから、平戸町の篤志家と協議し、費用を投じて発掘計画を立て、改葬の手續を完了した。

三浦家に代々伝わる「粗末な取扱いをしてはならぬ」との口碑が存する門前の畑の中にある墓墳は、昭和六（一九三二）年一〇月一〇日ついに鍬が入った。当日、発掘に立ち合ったのは、

倉田助役（平戸町役場）

江口警部補（平戸警察署）

山口衛生主任（平戸保健所？）

松本訓導（平戸尋常小学校？）および、その他の研究者・篤志家らである。<sup>(4)</sup>

遠見は玄海の海を望見し、平戸瀬戸を俯瞰する景勝の地である。まず三浦家門前の畑の中に入り、問題の地点の一角——竹やぶの中の墓墳の周辺を切り払う。塚の上には、自然石が一墓ある。その石碑（自然石）は無銘であり、南田平村城山に向いている。大きさは、高さ五尺（約一メートル五〇センチ）ほどで、その一半は地上に、一半は地中に埋められていた。上部は三角形である。

鍬を入れ、わずか三、四尺（約一メートル）ほど掘り下げると、早くも手がたえがあった。墳墓から出てきたものは、

頭部（頭蓋骨）の骨片……………一

肩骨、脊骨、肋骨、大腿骨などの骨片……………多数

臼歯……………一本

土器の破片……………一個

などである。<sup>(43)</sup>

これらの発掘品の位置は、石碑のすぐ直下に頭骨があり、それより肩・上肢・脊柱・腰・下肢の順序で骨が残っていたことから、遺骸は寝棺（縦約六尺二寸、幅約二尺一二寸）に入れて埋葬されたものと想定された。

その頭部と足部の位置から、遺体は五尺七、八寸（約一メートル七〇センチ）ほどの体格で、頭部は大きく、白人の骨格らしく思える節もあったという。<sup>(44)</sup>

「コックス日記」に見られるイギリス人の埋葬の模様から察するに、この遺体も入棺の際に肌着と経帷子（白衣）以外身につけず、他に何の物品をも収めることなく納棺されたものであろう。しかし、ここで疑問なのは、三浦家の畑の墓墳から発見されたのは、アダムズの遺骨であったかどうかという点である。それともそれはかれとは全く別人の骨であったものか。

平戸のオランダとイギリスの両商館およびかれらの墓地など、一切がっさい破却されたとき、アダムズの生存中にはもちろん、死後も遺族と懇意であった、平戸町崎方に住むオランダ通詞に御手洗某という者がいた。かれは「外人の墓地破壊に際し、其の発掘投棄の有様を見るに忍びず、ひそかに安針の遺骸を貰ひ受け、之を遠見に埋葬し、僅かに墓石を建立して世の注意を惹かないやうにし、其の祭祀方を子孫に口伝したのである。故に御手洗家にては、この墓は疎忽に取扱つてはならないとして、盆、正月などは香花を奠し居りたしと云ふ」。「平戸は安針墳墓の地」『平戸之光』第三号。

通詞御手洗某と同じ時期に、平戸藩に桜庭五左衛門という者がいた。その桜庭の養子内蔵右衛門の姉妹の一人は、通詞御手洗某の後嗣（あとつぎ）御手洗屋惣左衛門に嫁していた。その甥にあたる桜庭三郎兵衛は、御手洗家に寄寓し



ていたのであるが、惣左衛門に子供がなかったので、三郎兵衛を養子とした。その後享和元（一八〇一）年三月、弁右衛門正令の代に至り、藩に願ひ出て三浦姓に名を改めた。<sup>(45)</sup>

惣左衛門の嗣子三郎兵衛は、遠見のやや後方の六本松に転居し、墓地を遠見に設けるのだが、同地に相当の地所を所有していたらしい。<sup>(46)</sup> だからアダムズの遺骨をもらい受けた御手洗通詞が、自分の所有地に秘かにそれを埋骨したものと考えられた。

明治期より平成の今日まで、アダムズについて、実に多くの史家が研究を行ってきた。ことに平戸における埋葬地に関する説得力に富む、実証的な研究となると、実に少なく、アダムズはまだ闇と推測の世界を浮遊している。

享保年間（一七一六～二九年）、遠見の中腹の地で、多数の遺骨が発見されたという言い伝えがあり、また「近年（大正初期——引用者）、十字形に排列せる古銭の下に、若干の遺骨を発見したといふので、現に一碑を建てて無縁塔と題してある」<sup>(48)</sup> という。昭和二九（一九五四）年ごろ、こんどは遠見の三浦家門前ならぬ、裏手の畑の一隅（ザヴィエル記念碑の真うしろから一〇〇メートル離れた所）に、「小さな石の建ててあるのを」<sup>(49)</sup> アダムズの埋骨地だとする説が浮上し、われわれをますます混乱させるのである。ともあれ、あくまで史料（記録）と実地踏査とに重きを置いて調査研究に従い、記録上の考証はほとんど尽きた加藤が、さいごの掘り所としたものは、口碑と鍬の力であった。かれは他日の参考に供すといって、つぎのような重要な発言を行っている。「発掘されたる遺骨は、更に秘かに埋められたり。六本松の小麦様と称する塚、ならびに三本松と維明山との無名墓は共に探究の価値あるものなり」<sup>(50)</sup> と。

平成五年の晩秋、筆者は平戸市教育委員会社会教育課係長萩原博文氏の案内を得て、平戸のキリシタン墓地、崎方公園にある「三浦按針之墓」（図版V）とその周辺、および推定される外国人墓地の跡地などを見学した。が、将来平戸の郷土史家らの手で、三カ所に分葬されたと思える遺骨が発掘され、それに科学的なメスが加えられ、多年謎と

されて来たものが解かれ、アダムズ研究がさらに深まることを切望して筆をおく。  
〔追記〕本稿を草するうえで東洋文庫、早稲田大学中央図書館等の文献資料を利用させていただいた外、ロンドン在住のケネス・パウラー牧師、デニス・ヒースルブルグロウブ氏、およびジェフ・ステッソン教授らの教示を得た。記して謝意を表します。

注

- (1) ジリンガムにおけるアダムズの住居は、今の聖メアリ・マグダレン教区教会に近い「ジリンガム共有地」(Gillingham Green)の近くであったと考えられている(J. Bale, *Altermann and ex-Mayor of the Borough of Gillingham: The Epic Story of the Great Sea Adventure of William Adams, "Pilot-Major."* を参照。これはWilliam Adams, *The Pilot-Major of Gillingham Who discovered Japan, His Great Sea Adventure and Life in Japan*, Mackays Ltd, Chatham, England, 1934に収められている。同地区は高台にあり、あたりは今でこそ新興住宅地となっているが、かつてはジリンガム川と沼地を見下す、わびしい地区であったと思われる。
- (2) リーフデ号が漂着したのは、現在の大分県臼杵市佐志生であるらしい。
- (3) 幸田成友「三浦安針」〔史学〕第十五卷第一号所収、一四頁。
- (4) Ludwig Riess: *William Adams und sein "Grab" in Iemimura* (Vortrag, gehalten in der Generatorsammlung in Yokohama am 7. Februar 1900) のpp. 一三〇～一五三頁までがその部分。
- (5) Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Band VIII, (3 Theile, 1899-1902) Tokyo, für Europa im Alleinverlag von Asher & Co.
- (6) ルードヴィヒ・リース述「ウィリアム・アダムズと逸見に於ける彼れの墳墓」〔史学雑誌〕第十三編第六号所収、五九頁。
- (7) 同右の六一頁。また「倫敦日本協会雑誌」卷之六十 (The Transactions and Proceedings of the Japan Society, Vol.

XVI. 1917-1918) に掲載された「ウィリアム・アダムズの記念碑」(The Monument to Will Adams) には、逸見にある「古墳はウィリアム・アダムズの埋葬地である」としているし、「安針伝」(「雕蟲居写本」所収も逸見を終焉の地としている。なお The Dictionary of National Biography (Oxford University Press) 中のアダムズに関する記事も、逸見村の丘に葬られたと述べている (Vol. I, p. 106)。

(8) 前身は平戸維新館(藩校)、明治三四年二月県立中学校となる(平戸尋常小学校編「平戸郷土誌」歴史図書社、昭和五十四年二月)、九二頁。

(9) 加藤三吾「平戸に於ける英国商館の遺跡並にウィリアム・アダムズの埋骨地(第一回)」「史学雑誌」第十九編第三号所収、八八〜八九頁。

(10) 加藤三吾「三浦の安針」(明誠館書店、大正六年四月)、二六五頁。

(11) 同右。

(12) 「資料日本英学史 一上 英学ことはじめ」(大修館書店、昭和六三年二月)、四八頁。

(13) 注(12)の四九頁。

(14) ちなみにロンドンにおいて、同人の墓碑(非公開)を実見する機会にめぐまれたので、それにふれておきたい。ジョン・セーリスが一六二一年四月一日(慶長一六・三・六)クロウツ号、ヘクタ号、トマス号三隻を率いてイギリスのタウンズを出帆し、途中バンナム(ジャワ島北西部の村)に寄ったのち平戸に到着したのは一六一三年六月二日(慶長一八・四・二四)のことである。

かれは滞日中、平戸藩主松浦鎮信の知遇をうけ、さらに徳川家康、秀忠らに謁見し、ジェームズ一世の親書を手渡し、朱印状を得、さらに平戸にイギリス商館を設立し、一六一四年二月五日(慶長一九・一一五)帰国の途についた。晩年、ロンドン市フウラムの教会通りで余生を残り、一六四三年二月一日(寛永二〇・一一二)死去し、同月十九日「諸聖人フウラム教区教会」All Saints Fulham Parish Church に埋葬された。享年六三歳。

当時のフラムはロンドン橋の六マイル上流に位置するテームズ川畔のひなびた村であった。かれが晩年フウラムの教会通りで

で得たのは、そこがチームズ川の船着場に近く、交通も便利であったからようだ（教区牧師ケネス・ボウラー氏談）。ジョン・セーリスが眠る教会を捜し出すまで少々手間取ったが、地下鉄 Putney Bridge Station から歩いて五分位のところにある「諸聖人フラム教区教会」の起源は古く、一二世紀頃までさかのぼる。同教会はチームズ川の屈曲部に位置し、石造りのいかにもイギリス式建築といったものである。もともと往時の教会の形状は、塔こそ備えていたが、「納屋のような形をした建物」であった。中世以来、たびたび補修工事が行なわれて来たが、一八八〇年から翌八一年にかけて古い建物はとりこわされ、現在ある形になった。

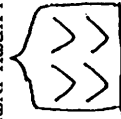
教会はチームズ川畔に近く、床は川の水面より三フィートも低かったので、高潮のときたび水にひたり、ゆえに建物のいたみもひどかったようだ。ジョン・セーリスの墓碑は、一八八〇年の改築工場のときも、手つかずのままであった。ジョン・セーリスの墓とそれに刻まれた碑文に最初に言及したのはアーネスト・サトウであり、また墓石の写真を初めて紹介したのは、戦前大阪駐在のイギリス領事を勤めたM・パスクリスミスである。かれは帰英中、墓を写真に撮り、日本に持ち帰り、長崎高等商業学校教授武藤長蔵はそれを乞うて複写・掲載の許可を得、まず「日英交通史料（二）」「商業と経済」所収、長崎高等商業学校研究館年報、第九年第二冊、昭和四・三）に発表し、ついで『日英交通史之研究』（内外出版印刷株式会社出版部、昭和一二年四月）に再掲載した。

筆者これまでに、ジョン・セーリスの墓石をじかに見たという邦人の報告に接したことがないので、改めて紹介することにす。アーネスト・サトウは、自ら編んだ『一六二三年——ジョン・セーリス船長の日本への航海』*The Voyage of Captain John Sars to Japan, 1613, Edited from Contemporary Records by Sir Ernest M. Satow, K. C. M. G., Hakujyū Society, London, 1900* の「解説」の中で、「かれの記念碑は、祭壇右手の床にある黒色の大きな石であるが、フラム教会に今も見られることであろう。しかし、それは一部聖歌隊席によって隠れている」(xxx)と述べている。

アーネスト・サトウが「解説」を執筆したときに利用したC. J. Feret 著「フラムの今昔」(*Fulham Old and New, 3 vols, 1900*)の第一巻二三〇頁を聞くと、一八八〇年から翌年にかけて教会の改築工事が行なわれた時、墓の石板はきれいに修繕され、紋章と碑文を再び刻んだ、という記述がみられる。墓石の大きさは、筆者の目測では縦二メートル五〇、横一メー

トル、二、三〇もあろうか。今もアーネスト・サトウの記述通り、聖歌隊席にある。大きな長椅子が墓石を三分の一ほど隠しているため、写真がうまく撮れなかった。墓石は、紋章の部分を含衆席に向けて、床に埋め込まれており、刻字はほとんど読めないほど磨滅している。

幸いM・バスターミス領事の自著『徳川時代——一六〇三〜一八六八年——の日本及び台湾における西欧の野蛮人』*Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, 1603-1868, J. L. Thompson & Co. Ltd. Kobe, Japan.* 1930に添えられた写真(図版参照)によって、かろうじて判読できる。碑文は次のようなものである。



HERE LYETH INTERED THE BODY OF CAPTAYN JOHN SARIS OF FVLHAM IN THE COWNTY OF MIDDLESEX. ESQ. WHO DEPARTED THIS LIFE THE 11 DAY OF DECEM. A<sup>o</sup> DNI. 1643. AGED 63 YEARS. HE HAD TO WIFE ANNE. THE DAVCTER OF WILLIAM MIGGES OF LONDON. ESQ. SHE DEPARTED THIS LIFE THE SECOND DAY OF FEBRVARY A<sup>o</sup> DNI. 1622 AND LIETH BVRVED IN THE PARISHS CHVRCH OF ST. BOTOLPH IN THAME-STREET. BE-ING AGED 21 YEARES.

右碑文の大意——

一六四三年二月一日、享年六三歳で没したミドルセックス州フウラムのジョン・セーリス船長の遺骸をここに眠る。その妻アンは、ロンドンのウィリアム・ミグズ氏の娘にして、一六三二年二月一日享年二一歳で没し、テームズ街の聖ボトロフ教区教会に埋葬された。

セーリスの妻が亡くなった年齢は二一歳となっているが、これは誤って刻んだもので、正しくは二九歳とすべきものようだ。セーリスの死後、その遺言により、大半の財産は異母兄弟であるジョージ（二六三年没）の子供たちに遺贈された。またフウラムの貧しい教区民三〇名に対して三〇ポンド贈り、かれらは毎週日曜日、説法がおわったあと二ペンス相当分のパンをもらった（サトウ著の「解説」lxxvii）。

(For this article I am indebted partly to *All Saints Fulham Parish Church* written by Mr. Kenneth Bowler (Vicar) and to *Reports on John Saris* by Mr. Dennis Heaslegrove, a local historian at Fulham in London.)

(15) 注(10)の二六四頁。

(16) 村上直次郎『貿易史上の平戸』（日本学術普及会、大正六年四月）、六四頁。

(17) 注(9)の九〇―九一頁。

(18) 注(10)の二四九頁。

(19) 同右。

(20) ちなみにRichard Baker著*The Needle-Watcher*, William Heineman, 1932の四九二頁に「二日後、平戸のZanzeburro宅で亡くなった」という条がみられる。

(21) 『イギリス商館長日記——訳文之上、下』（東京大学出版会、昭和五年三月）およびM. Paske-Smith, C. B. E.著*Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, 1603-1868*, J. L. Thompson & Co. Kobe, Japan, 1930の三九―四一頁を参照。

(22) 「リチャード・コックス日記」（一六二〇・二二・六付）の記事。

(23) 大阪駐在イギリス領事であったM. Paske-Smithは自著*Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, 1603-1868*, J. L. Thompson & Co. Kobe, Japan, 1930の中で「アダムズは終焉の地である平戸に埋葬された」と考えて差しかえない。葬られたのは「われらがふつうの埋葬地」であったに違いない」と書いている（五四頁）。

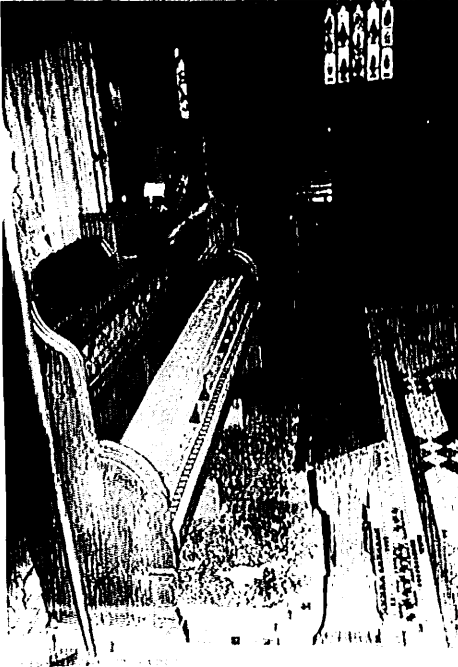
(24) 「リチャード・コックス日記」（一六二二・二・二三付）の記事。

- (25) 「リチャード・コックス日記」(一六二一・二・二六付)の記事。
- (26) 注(10)の二七二頁。
- (27) 加藤三吾「平戸に於ける英国商館の遺跡並にウィリアム・アダムズの埋葬地(第二回)」(『史学雑誌』第十九編第十号所収)、六七頁。
- (28) 同右、六八頁。
- (29) 注(27)に同じ。
- (30) Thomas Randal 編 *Memorials of the Empire of Japan : in the XVI and XVII centuries*. Burt Franklin, New York [発行年不詳]の八八頁に、アダムズの財産目録 (*The Inventory of the Estate of the deceased. Cap. W.M. Adams*) が載せてある。
- (31) 注(3)の四六頁。
- (32) 今日、墓とその前にある石灯籠の刻字は、磨滅し、判読するのに困難を覚えるが、石灯籠に「寛政十歳戊午二月」とある。
- (33) リバプールに生まれ、同地の製糸工場、ロンドンの生糸商に勤めた後、一八六七(慶応三)年に来日。幕府の軍用品調達などを引き受けた。流暢な日本語を話し、日本人から「ワタリさん」と呼ばれた。晩年、慈善事業などに尽し、山手一五三番の自宅で病死した(『市民グラフ ヨコハマ No.33. 一九八〇年』)。
- (34) 蛸窟居士「按針塚の記」(『平戸之光』第二二号所収)、二二頁。
- (35) 「平戸は安針墳墓の地」(『平戸之光』第三号)、一六頁。
- (36) 同右。
- (37) 注(35)の一九頁。
- (38) 同右。
- (39) 注(35)の一八頁。
- (40) 注(27)の六九頁。

- (41) 『三浦按針乎』〔平戸之光〕第二号、四五―四六頁。
- (42) 同右、四六頁。
- (43) 『平戸之光』(三号)の二二頁、同(二号)の四六頁を参照。
- (44) 注(41)の四六頁。
- (45) 注(43)の二〇頁。
- (46) 同右。
- (47) 山鹿誠之助「平戸に於ける貿易時代の遺蹟」〔歴史と地理〕第一卷第二号所収、一一〇―一二〇(二四〇)頁。
- (48) 同右。
- (49) 矢動丸広『平戸史話』、九四頁。
- (50) 注(27)の七〇頁。

なお平戸のイギリス商館およびアダムズに関する最近の研究に、萩原博文氏の「平戸イギリス商館の諸施設とその位置」、山口康夫氏の「三浦按針と平戸」(共に『紅毛文化と平戸——江戸初期の国際都市「平戸」——』所収、平戸市文化協会、平成二年三月)などがあるので参照されたい。

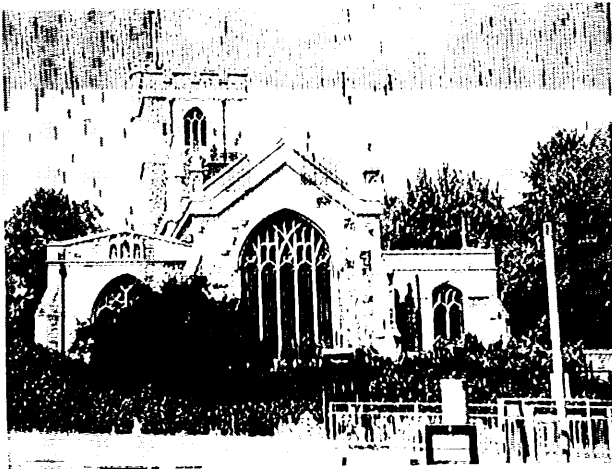




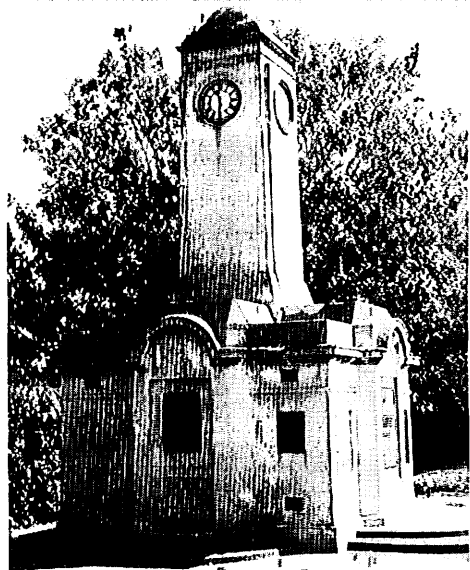
「諸聖人フッラム教区教会」内の  
ジョン・セーリスの墓【筆者撮影】



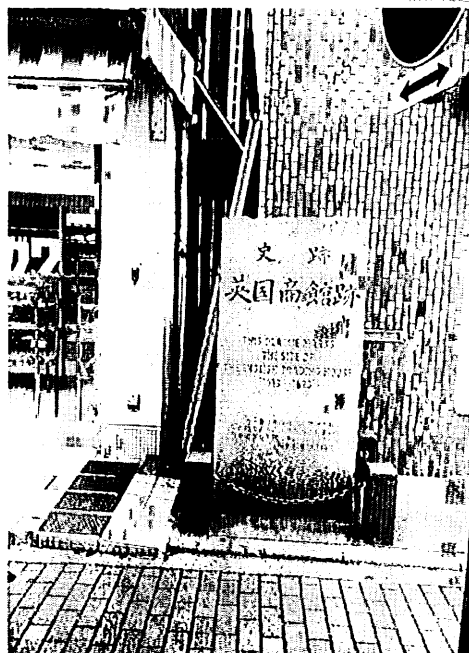
ジョン・セーリスの墓の碑文  
(M・バスクースミスの著書より)



ロンドンの「諸聖人フッラム教区教会」  
【筆者撮影】



ケント州ジリングムにある  
ウィリアム・アダムズの記念碑  
(時計塔) [筆者撮影]  
[図版Ⅰ]



元和7(1621)年製作の平戸図より  
(ハーグ文書館蔵)  
[図版Ⅱ]

平戸のイギリス商館跡を示す記念碑  
(図版Ⅲ)



平戸の崎方公園にある  
ウィリアム・アダムズの墓  
【図版V】



横須賀・逸見の塚山公園にある  
ウィリアム・アダムズ夫妻の墓  
【図版IV】



現在の平戸の全景  
【図版VI】

## THE FINAL RESTING PLACE OF WILLIAM ADAMS

Many views have been proffered as to the burial site of the English pilot major, William Adams (1564–1620) who died in the town of Hirado on the island of Kyushu. Though the exact site of his grave has yet to be ascertained, he most probably was originally laid to rest in the “Christian buriall place” (13 tattamies square), located on the southeastern hill called Tōmi oka (遠見丘). In the first decade of this century, Mr. Sango Kato (加藤三吾), local historian of Hirado and a teacher at the middle school (Yūkōkan), determined that the burial grounds had been on a hillside situated behind the former home of a Mr. Kinjūro Yamagata (山県金十郎). Kato made this determination based upon the diary of Richard Cocks and his interviews with the elderly men of the area. A prior estimate as to the whereabouts of this site were made by Ludwig Riess (1861–1928), a lecturer of history at the Imperial University of Tokyo. Professor Riess’ conjectures, however, were proven to be in error and thus inspired Mr. Kato to conduct his own investigation.

Because of the politically – charged times of the Japanese Christian rebellion at Shimabara and to avoid the displeasure of the Tokagawa government, the feudal lord, Shigenobu Matsuura (松浦鎮信) in 1637 ordered the total destruction of the “Christian buriall place.” As legend has it, the majority of the bones of the Europeans buried there were unearthed and cast away in the offshore of Hirose. Some bones, however, remained and were secretly re–interred elsewhere by the Dutch interpreter, Mitarai (御手洗). Mitarai had been a close friend of Adams and he remained close with his surviving relatives, in loyalty to his friend, Mitarai buried the remaining bones at Tōmioka and requested that his own descendants continue to perform the Mass for the Dead. Legend also has it that many bones

were discovered in Tōmioka during the Kyōho period (1716–1729). Early in the Taisho period (1910s), after some bones were discovered under a group of coins arranged in the form of a Christian cross, a monument was erected on that spot. Also, from time to time over the past fifty years, several other bones have been unearthed.

It was on the 10th of October in the 6th year of Showa (1931) in the corner of a field owned by the descendants of Mitarai, the Miura family, that the supposed grave site of William Adams was excavated. In attendance were : Mr. Kurata, headman's assistant ; Mr. Eguchi, an assistant police inspector, Mr. Yamaguchi, a health officer, Mr. Matsumoto, a licensed teacher at the elementary school in Hirado ; as well as some philanthropists and other researchers. What they found at the site was a cranium, a broken scapula, portions of a backbone, ribs, a thigh bone, molar teeth, as well as a fragment of an earthen vessel and a large number of rusted nails. The researchers could conclude that the body had been buried in a Western-style coffin and that the deceased was a white man of sturdy build and was more than 170 cm in height. However, it was not possible, from this evidence, to authenticate the fact that these were the bones of William Adams.

Currently in Japan, there are two grave markers for William Adams. One is in the Tukayama Park (塚山公園) at Emi in Yokosuka City. This marker was placed there in the 10th year of Kansei (1798). A Yokohama merchant named James Walter (1847–1909) discovered this marker in 1874. However, when the grave was excavated on the 28th day of May in the 38th year of Meiji (1938), nothing was found within this grave. This adds further confidence to the contention that Adams died and was buried at Hirado.

The second, Hirado, marker is located in Sakikata Park (崎方公園). Inscribed upon it is Miura Anjin no haka (The grave of W. Adams) and was placed there in the 29th year of Showa (1954).

The remains interred there were those the loyal Miura family had dutifully guarded after the 1931 excavation.

From the information available to us now, the only conclusive evidence we have is that William Adams did, indeed, pass away in Hirado. However, as to the location of his final resting place, the issue remains open.

30<sup>th</sup> Nov. 1996

Prof. Jeff Stetson

Prof. Takashi Miyanaga